



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

四旬節第3主日 C年 (2022年3月20日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：出エジプト記 3章1—8a、13—15節

第二朗読：コリントの信徒への手紙一 10章1—6、10—12節

福音朗読：ルカによる福音書 13章1—9節

ともにいる神は、人間の悔い改めを辛抱強く待つ神

今日の福音朗読は二つの物語から成り立ちます。一つはエルサレムで実際に起こった事件を題材にしたイエスさまの教えです(1-5節)。もう一つは三年間も実を結ばなかったいちじくのたとえです(6-9節)。

エルサレムで起こった事件を題材にした教え(1-5節)

エルサレムで起こった二つの事件(ガリラヤ人たちの殺害とシロアムの塔の倒壊)を取りあげながら、イエスさまは人々の罪に対する理解を修正しようとしているかのようです。人々は不幸な出来事はすべて罪の結果だと考えていました。殺害されたガリラヤ人たちは過去に何か罪を犯していたから、このような災難にあったのだと理解したのです。偶発的な事故でしかないシロアムの塔の倒壊で不幸にも死んだ十八人もまた罪を犯した結果なのだとして理解しました。こういった罪への理解は、自分はそういった不幸に巻き込まれなかったから罪人ではないという誤った意識を生み出します。そして、事件や事故があるたびに不幸な目にあった人を断罪し、自分は掟や決まりを守っている汚れない正しい者だと思いきよくなるでしょう。

イエスさまがおっしゃりたいのは、罪というものは不幸な出来事に遭遇して初めて自覚するようになるのではなく、人間のこころのうちに根深くある現実にあるということでしょう。イエスさまは「あなたも悔い改めなければ」と繰り返します(3、5節)。悔い改めるとは、イエスさまと一緒に生きていくことです。そして、イエスさまをこの世に遣わした父なる神の愛を信じるようになることを意味します。

三年間も実を結ばなかったいちじくのたとえ(6-9節)

ここで語られるたとえと類似した民話がイスラエルの人々の間で広く知られていたのではないかと言われています。その民話の結末はイエスさまのたとえとは正反対だったそうです。水辺に植えられて

いながらも実を結ばない木について園丁が「植え替えてください。それでも実を結ばなかったら、切り倒してください」と木の所有者に願います。しかし、「水辺に植えられていながらも実を結ばない木が、どうして別な場所で実を結ぶだろう」と木の所有者は切り倒してしまいます。

それに対してイエスさまが話されたたとえば「ご主人様、今年もこのままにしておいてください。木の周りを掘って、肥やしをやってみます」(8節)と園丁が懇願するところで終わっています。イエスさまのたとえ話の方が将来への可能性が残されています。おそらく、イエスさまが話されたたとえを聞いた人びとは最初の民話をよく知っていたのでしょう。しかし、イエスさまの結末は彼らの期待したものではありませんでした。イエスさまは裁きの厳しさではなく、待ち続ける忍耐を伝えようとしています。

たとえ話の中の園丁は三年間も待ち続けます。さらに「木の周りを掘って、肥やしをやって」みようとしします。園丁の忍耐から見えてくるのはいつくしみです。しかも園丁はもし実を結ばなかったら、自分で切り倒しますとは言いません。「切り倒してください」と願います。いつくしみ深い園丁は最終的な決断すらもゆだねるのです。

説教：神さまと共に

「あなたがたも悔い改めなければ」(ルカ13章3、5節)とイエスさまはおっしゃいます。悔い改めるとは神さまの方へと向きを変えることです。人間が自分の力に頼って何かをしようとしているのを止めて、それから神さまの方へと向きを変えて神さまと一緒に、神さまの助けを借りて生き始めることです。

人間は自分の理解や能力に頼って、この世界をとらえようとしします。不幸な出来事が生じると、あの人たちは何か罪を犯したからだと考えます。しかし、自分は大丈夫とホッと胸をなで下ろします。実は不幸な出来事はその人のせいではないのです。

逆もあるでしょう。すべて神まかせで何にもしないという態度です。よく聞こえてくる「み旨のままに」という言い方は、自分の努力を放棄する生き方へとつながりかねません。

今日の福音朗読で災難に遭ったガリラヤ人たち、シロアムの塔が倒れて死んだ18人は、罪人だったから辛い目にあっただけだという人間的な理解をイエスさまは退けます。また、せっかく一年間待ってくださいと園丁が願っているにも関わらず、実をつけるように努めないいちじくの木は切られてしまいます。

神さまは共にいてくださる神さまです。そして相手にあわせて「ありてある者」です。神さまの救いの想いは人間との協力、人間との協働を通じて実現するのです。

毎日のようにウクライナの戦況が伝えられて、こころが傷みます。テレビのコメンテーターは、すべて人や政治のせいになります。また、ある人たちは「神さま平和をください」と願います。どちらの態度も間違っていない。しかし、キリスト者に求められる態度は、平和をもたらしてくださる神さまと一緒に協力して、神さまと力をあわせてウクライナとロシアの人々に尽くすことです。それは、祈りからはじまります。